

播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖
☎ 079(435)5000



▲古宮薬師堂 今里傳兵衛の墓(左)

エピソード拾壺

身命をかけた新井開削

新井は、加古川大堰おおぜき（八幡町中西条）から播磨町の古宮大池までの14km弱を流れる用水路で、明暦2（1656）年3月に開通しました。

江戸の初め〔慶長元（1596）～寛永21（1644）年〕は、姫路城などの城の建築が盛んに行われましたが、寛永の大飢たいききん〔寛永19（1642）～20（1643）年〕を境に、干ばつや水害対策、新田開発などの農業政策へと移っていきました。古宮組19カ村の大庄屋おおじょうやで古宮村（現播磨町）の庄屋を兼ねていた今里傳兵衛いまざとでんが、姫路藩主榊原忠次に新井開削しんいを願い出たのは、政策転換から10年余りが経った承応3（1654）年のことでした。

この年は大干ばつで、春と夏に雨が降らず、池や野井戸の水は干上がり、田は地割れして苗も枯れ、畑の作物もとれませんでした。これでは餓死者が出ると思った傳兵衛は、多年の念願を実現させる一大決心をします。傳兵衛は、現地を何度も歩いて経路や高低差、利用できる水路などを調べました。そして、水を利用する23カ村の庄屋たちを自宅に集め、苦勞のすえ作り上げた絵図面を広げて水の恵みを説明しました。庄屋たちは、その

計画に心打たれ、全員署名して協力を誓いました。難工事は、日岡山山麓の固い岩盤削り、喜瀬川の底に水を通す埋樋うずみび（資料館模型展示）、傾斜がほとんどなく逆勾配もある加古川の台地に水を流すことでした。

傳兵衛は、藩主忠次に願い出たとき、「新溝で水が流れないときは、家族もろとも極刑にされても構いません」と早期の工事着工を強く要望しました。傳兵衛の身命をかけた計画に感銘した忠次は、直ちに測量を命じ、藩の事業として着工させました。秋も深まったの陳情にもかかわらず、年内に設計を終え、新年早々着工できたのは、傳兵衛の綿密な計画があったからだといわれています。藩内全域から延べ16万4千人の人足が協力し、わずか1年余りで通水を成しとげました。一日平均400～500人の人足には、米が支給されています。

傳兵衛は、新井に水が流れてから3年後の万治2（1659）年に亡くなりました。お墓は古宮薬師堂の墓地にあり、先妻と後妻の3人の名が刻まれた夫婦墓なので、お参りすると夫婦円満のご利益があるかもしれません。

町の人口 1月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)
34,660人(+37人) 男…16,997人(+20人) 世帯数…13,965(+26)
女…17,663人(+17人)